プルーストと堀辰雄

―― 「燃ゆる頬」の主題をめぐって ――

禹　朋子

１．堀の読書体験と創作

書簡等に見る読書状況

創作ノート「プルウストⅤ」

同時期のプルースト論

２．「ばら色の頬」の意味と機能

堀における「ばら色の頬」の象徴的機能、少女への嫉妬、成功しない取り持ち

『失われた時を求めて』における呼応

堀辰雄がプルーストの熱心な読者であったことはよく知られている。その作品へのプルーストの影響についても多くの論考があるが、その対象は「美しい村」に集中している。また「美しい村」の主人公が見とれる野ばらに、『失われた時を求めて』のさんざしをを見て取るのは容易であるし、一人称の使用についての論議[1]も、プルーストを少しでも熱心に読んだことのある読者にとってそれほど目新しいものではない。では、堀がプルーストからくみ取ったエッセンスは、それほど表層的なものに尽きるのだろうか。

本論は、堀の「燃ゆる頬」及び「顔」に典型的に見られる「ばら色の頬」のテーマが作品中で果たしている機能に、プルースト作品との呼応を読みとる試みである。

１．堀の読書体験と創作

書簡等に見る読書状況

堀がどの時期にどこまでプルースト作品を手にし、読んでいたかは、書簡及び当時発表された文章などによって、ある程度知ることができる。書簡にプルーストの名が出てくるのは案外早く、1929年には次のような記述が見られる[2]。

・２月１９日付　神西清宛

「君のよりプルウスト又はヂッドへの肉迫を僕は期待する」(8, p.57)

・８月１５日付　神西清宛

「今年大学を出た奴が四人がかりでプルウストの「スワン」を訳して持ってきた」
「「文学」でプルウストを本格的に紹介したいと思う」(8, p.60)

しかしより本格的な読書活動に入るのは、やや後のことであり、1931年の書簡からは、原書を入手しようとする様子がうかがえる。

・２月１９日付　神西清宛
「僕はプルウストの「ソドムとゴモル」を読もうつて野望を起こしている。それで、Iと、IIの☆☆はどうにか手に入れたけど、IIの☆と☆☆☆がないんだ。どうせ、君はいまそんなものを読んでいられまいから、君の奴を一寸拝借したいと思う。[……] 僕も別に注文しておくから、そっちが着くまで、貸して置いてくれるように頼む。」(8, p.67)
・３月２１日付　神西清宛
「僕はいよいよ四月上旬富士見に行くことになった。[……] 行くまえに一度会いたい、「ソドムとゴモル」も借りていきたい、君の都合のいい時間に銀座資生堂（下がいい）で落ち合えるように返事をくれ」(8, p.69)

『失われた時を求めて』は複数の巻からなっている。上記書簡中のI, II等、ローマ数字で示されているのはプルースト自身による区分であり、☆は分冊の数をあらわしている。各巻のタイトルと区分は下記の通りであるが、このあと触れるように、分冊数はエディションによって異なっている。

Du Côté de chez Swann I, II（「スワンへの方へ」以下CS、「スワン」と略記）
A l'ombre des jeunes filles en fleurs I, II（「花咲く乙女達の蔭に」同JF、「 花咲く乙女 」）
Le Côté de Guermantes I, II（「ゲルマントの方」同CG、「ゲルマント」）
Sodome et Gomorrhe I, II（「ソドムとゴモラ」同SG）
La Prisonnière（「囚われの女」同Pr）
Albertine disparue（「消え去ったアルベルチーヌ」同AD）
Le Temps retrouvé（「見出された時」同TR）

上記書簡で言及されている「ソドムとゴモラ」I は、1922年の初版では「ゲルマント」II と合冊で発売されており、問題の手紙が書かれた1931年当時、その形式は変更されていない。従って堀はこの時点で少なくともこの両方を含む一冊を手にしていたはずである。一方「ソドムとゴモラ」IIは、1922年に初版が三分冊で発売された。1931年までの期間、この形式が踏襲されていたと考えられる[3]。堀が手にしていた「ソドムとゴモラ」II☆☆は、現行の新プレイヤッ

ド版[4]では、第III巻のpp.190～352 にあたり、バルベックのカジノでアルベルチーヌとアンドレがダンスをする場面からバルベック近郊にヴェルデュラン夫妻が借りた館での夕食会の場面のほぼ終わりまでを含んでいる[5]。「IIの☆と☆☆☆」については、実際に借りることができたかどうかはこの書簡からだけでは断定できない。

ところで上記２月１９日付書簡には次のような注が付いている。「ここに出てくるプルウストの『失はれし時を求めて』は、通常の十五巻本ではなく、元版の十三巻である。左にその巻構成を掲げておく。」（8, p.447）注が示している構成は、以下の通りである。

「スワン家の方へ」☆　☆☆
「花咲く乙女達のかげに」☆　☆☆
「ゲルマントの方」☆
「ゲルマントの方」☆☆と「ソドムとゴモラ」I
「ソドムとゴモラ」II（☆　☆☆）
「囚はれの女」（「ソドムとゴモラ」III＜II☆☆☆＞）
「消え失せたアルベルチーヌ」☆　☆☆
「見いだされた時」☆　☆☆

この注は、いくつかの問題を含んでいる。この時点で堀が全ての巻を所有していたわけではないことは当該書簡から明らかである。借りるなどして全巻を読んだとする理由も示されていない。また堀自身が所有していた巻と、複数の友人達から借りた巻の全てが同一の版に属していたとする根拠も示されていない。堀が「十三巻」本を使用したと断言するのはいかなる理由によるものであろうか。

また、ここで言う「元版」とは一体何を指しているのであろうか。各巻の初版について言うならば、その冊数の内訳はCS一冊、JF一冊、CGI一冊、CGIIとSGIで一冊、SGII三冊、Pr二冊、AD二冊、TR二冊であり、注の内容とは一致しない。

更に問題の注は「囚われの女」が「ソドムとゴモラ」IIIであり、SG II☆☆☆として刊行された、としている。すなわち、堀が2月19日の書簡で借りたいと希望してい「ソドムとゴモラ」IIの☆☆☆イコール「囚われの女」だと言うのである。確かに「囚われの女」が「ソドムとゴモラ」IIIとして扱われた時期は存在する[6]。1923年の初版では「囚われの女」のサブタイトルとして「ソドムとゴモラIII」の標記が用いられた。この巻は死後出版であるため、プルースト本人が残したタイプ原稿の標記をそのまま踏襲したものである。しかし既に示したように、少なくとも1931年までの間、「ソドムとゴモラ」IIが「囚われの女」を含む形で分冊されていたとは考えがたい。先ほど参照した新プレイヤッド版の注は、三巻本「ソドムとゴモラ」IIについ

て、第三分冊の終わりを現行の「ソドムとゴモラ」IIの終わりとしていることを指摘しておきたい。

さて、先ほど引用した書簡中に「富士見」とあるのは、富士見高原療養所のことである。堀は1931年の4月から6月までここに入所している。この療養所から堀は葛巻義敏に次のように書き送っている。

・４月（推定）１６日付
「プルウストの「ゲルマント」を有難う。」(8, p.70)
・５月５日付
「僕は君にプルウストの jeunes filles を読むことをすすめたい」(8, p.71)

堀がこの時期既に「ゲルマント」IIと「ソドムとゴモラ」 Iの合冊を入手していたことは先に見た。しかしここで言及されている「ゲルマント」がこの合冊なのか、 「ゲルマント Ｉ 」なのかはわからない。「花咲く乙女」についても、堀が読んでいたのがどの巻かはこれだけでは不明である。

この時期、堀はプルーストに関する文章をいくつか発表しているが、1932年８月のものに「プルウスト雑記」がある。これは、神西清宛の三つの書簡を、それぞれ「新潮」「椎の木」「作品」に発表したものである。各手紙には日付も入っており、その第一の手紙（1932年７月７日付)にはこうある。

> 何もプルウストのことを君に話して聞かす自信があるほど、僕はまだ充分には読んでいない。君のところからプルウストの本を腕一ぱいかかえて借りてきたのはもう数週間前だが、[……] とても、その一冊だって初めから終わりまで通読しようなんという気にはなれない。だから僕は手あたり次第に一冊引っこ抜いては、出まかせに開けた頁を読むことにしている。(3, p.359-360)

以上の資料から推測されるのは、この時点で堀はいまだ『失われた時を求めて』の全巻を所有してはいないこと、また1931年春にある程度の読書はしていたが、翌1932年の初夏には改めて大量の巻を手にして更に読書を続けているということである。

<u>創作ノート「プルウストⅤ」</u>

堀は多くの創作ノートを残しており、プルーストに関するものは「プルウストⅠ－Ⅸ」とし

て、一部ファクシミレ版で全集に収録されている（7上, p.75－140）。このノートからもプルーストの読書体験の経緯を伺い知ることができる。この問題については、渡部麻美氏による堀家蔵書調査も含めた論考がある[7]。

渡部氏は、その内容と堀の蔵書への書き込みから、「プルウスト V」はプルーストノートの中でも最も早く、1931年春から1932年夏にかけて成立したものとしている。氏の論旨は次の通りである。このノートの中で堀は『失われた時を求めて』全体の把握のため、『カイエ・マルセル・プルースト』２，３[8]から多くの抜き書きをしている。『カイエ・マルセル・プルースト』２は『失われた時を求めて』の主要登場人物を人物毎に解説したものであり、３は作品の抜粋集である。この抜粋集には引用のレフェランスは付いていない。そこで堀は、所蔵していた『失われた時を求めて』原著の各巻に照らし合わせて、自らのノートの抜き書きにレフェランスを書きつける一方、使用した蔵書には抜粋集の編者が各エクストレにつけたタイトルを書き写している[9]、というのが氏の調査結果である。また「プルウスト V」には堀が自ら書いたと思われる日本語のノートが見られる。このノートが言及している内容も、前述のレフェランスをつける作業が行われたのも「花咲く乙女」「ゲルマント」「ソドムとゴモラ」に限られていることから、堀が実際に入手していたのがこれらの巻に限られると氏は結論している。ノートの成立時期については、先ほど見た神西清宛1932年7月7日付書簡が論拠となっている。神西から借りたのが、上記の三巻に限られるとは考えにくいからである。

『カイエ・マルセル・プルースト』３の抜粋には編集者によって1から57まで通し番号が振られ、各々に表題が付けられている。堀はそれらを忠実に写しているので、これを見分けるのは容易である。堀がこれにレフェランスを書き加えている例として、渡部論文では「花咲く乙女」から一例のみが挙げられているが、「プルウスト V」に見られる『カイエ・マルセル・プルースト』３からの抜き書きに対する原書の巻・ページの書き込みを列挙すると以下のようになる。

JF ☆☆ : 19-21, 27-28, 29-34, 49-64, 123-128
CG II chapitre I : 7-35
CG II chapitre II : 98-252, 111-124, 240-252
SG II chapitre II : 147-149, 160-163

「JF ☆☆」における最初の書き込み（p.19－21）と最後の書き込み（p.123－128）は、それぞれ抜粋の23番と27番にあたる。内容は、23がバルベックでのヴィルパリジ夫人の馬車での散歩、27がエルスチールのアトリエへの最初の訪問である。これはそれぞれプレイヤッド新版ではII, 76－79とII, 190－196に対応する。JFは初版の一巻本以降、1931年までに二巻本あるいは三巻本で流通していたが、このページ数からして当時堀が使用していたJF ☆☆は、二分冊中

の二冊目ということになる[10]。この巻は、内容的にはJF IIであり、主人公の第一のバルベック滞在をカバーしている。JF I に関してはページの書き込みがみられないことから、当時堀は「花咲く乙女」については、この第二分冊のみを手にしていたとひとまずは考えられるかもしれない。

渡部論文では、はっきりと指摘されていないが、堀が独自に原書のページ数を書き入れたのは、『カイエ・マルセル・プルースト』３からの抜き書きに対してばかりではない。「プルウスト V」には、『失われた時を求めて』のいくつかの巻・章の主たるエピソードを堀が書き込んだ上で、原著の該当ページを書き加えている例があり、その対象となっているのは、以下の巻・章である。この場合も堀が手許に対象の巻を置いていたと考えられる。

CG II chapitre I, II
SG II chapitre I, II, III, IV

これは、分冊の状況にかかわらず、CG IIとSG II の全体に相当する。したがって、1931年2月の神西清宛書簡で問題になっていた「ソドムとゴモラ」IIの第一分冊と第二分冊は、療養所入所前に無事借り受けたものと推論できる。その療養所から葛巻に宛てて書いた書簡で、堀が「ゲルマント」を貸してくれたことに対する礼を述べていることは先に見た。「ゲルマント」I については原著ページの書き込みが見られないことから、その書簡で問題になっているのは、２月の神西宛書簡で既に入手したと述べられている「ゲルマント」II と「ソドムとゴモラ」I の合冊である可能性が高い。

さて、この各巻・章概要の出典はどこにあるのだろうか。「ゲルマント」II の場合、堀が記しているのは、作品中、各章の初めに置かれた記述である。「花咲く乙女」II 関連のノートに見られるのは、この巻の目次に附記された内容紹介である。このような要約は、堀のノートでは原著ページ記載のない巻である「花咲く乙女」I についても書き込まれている。この目次内の内容紹介は、問題の巻本、ないしはその広告等を含む巻本によらなければ知ることができないと思われる。したがってこのノートの作成時、堀が手にしていた原著の巻本のすべてについて該当ページを書き込んだとは断言しきれない。

渡部論文では、逆に堀が蔵書に『カイエ・マルセル・プルースト』３の項目を書き入れた例が示されているのだが、残念ながら一例しか言及がない。もちろん蔵書には、この時期以降に入手した巻もあるだろうし、また蔵書ではないが、当時人から借りて手許に置いていたものもあると考えられる。しかし堀の蔵書のうち、どれに同様の書き込みがあるかは興味深い調査となるであろう。更に堀の蔵書目録は、全集別巻２に収められいるが、『失われた時を求めて』の原書に関しては（同巻 p.539 ― 540）記述方法が極めて不完全であることからも、再調査が望ま

れる。

同時期のプルースト論

1932年から1934年にかけ、堀はプルーストに関連する文章を次々と発表している。その中には、プルーストについて書かれた論考についての批評もしばしば述べられており、堀が熱心にプルーストを吸収している様子がうかがえる。発表順にこれを列挙し、堀の読書状況を示す記述を挙げてみる。カッコ内に言及されている巻・章を略号で示した。

・「日付のない日記」 1932.5（『全集』4, p.32-35）
　　エルスチールの水彩画（JF II）
・「プルウスト雑記」 1932.8（3, p.358-378）
　　コンブレでのゲルマント公爵夫人（リヴィエールからの孫引きか）（CS I）
　　オペラ座でのゲルマント公爵夫人（デュ・ボスからの孫引き）（CG I）
　　エルスチールの水彩画（JF II）
　　ジャック・リヴィエールのプルースト論からの孫引き（CS I, II）
・「文学的散歩ープルウストの小説構成」1932.12（3, p.379-383）
　　バンジャマン・クレミユ「二十世紀」からの孫引き（ CS I,II, JF I,II, CG I,II, SG II）
・「プルウスト覚書」 1933.5（『全集』では「続プルウスト雑記」4, p.384-399）
　　「私は「ソドムとゴモル」を読み出した。が、すぐにそれを放棄しなければならなかった」
　　「私は寝ながらプルウストの「再び見出された時」を読み始めた」
　　「私がまだ充分に読んでない「ソドムとゴモル」や「囚はれの女」を読み終ってから」
　　無意志的記憶体験について（CS I, JF I, II, SG II, TR）
・「フローラとフォーナ」 1933.8（3, p.400-403）
　　「クルチウスの「プルウスト」」
・「マルセル・プルウストの文章」1934.5（『全集』では「プルウストの文体について」3, p.404-410）
　　言及されている巻：CS

発表作品との時間関係

一方、この間の創作も旺盛で、1932年から1933年に限っても下記の作品が発表されている。これに前述の評論を発表順に重ねて示すと次のようになる。

1932年

1月　「燃ゆる頬」（『文芸春秋』）

「病める人」（年刊『小説』＜『詩と詩論』別冊＞）
3月　「花売り娘」（『婦人画報』）
4月　「墓畔の家」（『作品』）
5月　「馬車を待つ間」（『新潮』）
「とらんぷ」（『婦人サロン』）
・・・「日付のない日記」
7月　「花を持てる女」（『婦人画報』）
・・・「プルウスト雑記」
9月　「麦藁帽子」（『日本国民』）
・・・「文学的散歩」
1933年
1月　「顔」（『文芸春秋』）
4月　「ジョヴァンニ・モロニ」（『作品』）
・・・「プルウスト覚書」
6月　「山からの手紙」（「大阪朝日新聞」）（のちに『美しい村』「序曲」）
「雪の化身」（『文学』）
7月　「死後の許嫁」（『若草』）
・・・「フローラとフィオナ」
9月　「旅の絵」（『新潮』）
10月　「野いばら」（『短歌と方法』）
「美しい村」（『改造』）（のちに『美しい村』「美しい村」）
「夏」（『文芸春秋』）（のちに『美しい村』「夏」）

これを見ると、1933年初夏以降、のちに『美しい村』を形成することになる作品群が書かれている。プルーストと関連書の読書が進んだ時期であり、堀によるプルースト論考の殆どもこの頃までに発表された。だからといって、これ以前の作品にプルーストとの呼応関係が見ないで済ませることはできない。冒頭に述べた通り、本論では「燃ゆる頬」「顔」の二作品を取り上げ、分析する。この二作品には、堀の、より直感的なプルースト理解が見られるように思われるのである。

内容の分析に先立ち、これまでに述べた堀の読書状況を整理すると、次のようになる。
・「燃ゆる頬」発表までに確実に入手していた巻　JF II, CG II, SG I, SG II
・「燃ゆる頬」以降「顔」発表までの著作で言及のある上記以外の巻 CSI, II, JF I, CG I, TR

上に挙げた評論にはかなりの孫引きが含まれており、堀が以上の巻をくまなく読んでいたと断ずることはできない。しかし一方、『カイエ・マルセル・プルースト』２，３により、堀は実際には読んでいないかもしれない巻の内容もかなりの程度把握していたことを確認しておきたい。例えば、この後取り上げる『失われた時を求めて』の主要登場人物の一人、サン＝ルーについて、ページ参照のない「ゲルマント」Ｉのエピソードについても「プルウストＶ」次のような記載がある。カッコ内に拙訳を記する。

> Robert de Saint-Loup : -- reçoit avec joie Marcel à Doncière où il est en garnison, dine avec lui, le fait coucher dans sa chambre （７上, p.89）
> （ロベール・ド・サン＝ルー　自分の駐屯地ドンシエールにマルセルを喜んで迎える、マルセルと夕食を共にし、自分の部屋に泊まらせる）

また、彼の同性愛が主人公の目に明らかになる巻についても次のように詳細な記載がある。

> ALBERTINE DISPARUE ****
> CHAPITRE IV Nouvel aspect de Robert de Saint-Loup
> Robert de Saint-Loup : - épouse Gilberte Swann. Une fois marié, dédaigne le monde elegant - sa liaison avec Morel - Lors du troisième séjour à Balbec avec sa femme et Marcel, fait l'œil à un garçon - Révélations sur lui par Aimé. （７上, p.111）
> （消え去ったアルベルチーヌ****/　第４章　ロベール・ド・サン＝ルーの新たな面/　ロベール・ド・サン＝ルー　ジルベルト・スワンと結婚。ひとたび結婚するや、エレガントな世界を軽視する。モレルとの愛人関係。妻およびマルセルと三度目のバルベック滞在時、ギャルソンに色目を使う。彼に関するエメの暴露）

モレルはシャルリュス男爵の愛人でもあるピアニスト。エメはバルベックで主人公らが宿泊しているホテルの給仕長で、サン＝ルーが最初の滞在当時からホテルの男性従業員を追いかけていたことを主人公に明かすのである。

２．「ばら色の頬」の意味と機能

堀における「ばら色の頬」の象徴的機能

堀の「燃ゆる頬」[11]は、1932年１月に発表されている。このタイトルは、一般にはラディゲの詩集、*Les Joues en feu* [12]と関連づけられているようである。確かに堀は、これ以前にラディゲの詩をいくつか訳しているが[13]、内容的には寧ろプルーストの影響を見て取るのが妥当であ

ると思われる。

物語は、主人公、上級生の魚住、同級生の三枝を中心に展開する。魚住は大男で円盤投げの選手であり、三枝は逆に病弱な「少年」である。魚住は、主人公に関心を示す一方、三枝にも言い寄っている。三枝が主人公に助けを求めたことから、二人は深く付き合うようになる。

この筋書きだけを見ると、「ヴィタ・セクスアリス」にも通じる旧制高等学校の寮における少年愛の物語ともいえるかもしれない。しかし、主人公と三枝が、とある半島へ旅行に出かけたところで話は反転する。二人は旅行中に出会った村の少女達に心引かれ、少女達との恋愛においては互いがライバルであることを認識するのである。最終的に魚住は高校を去り、三枝は病死し、主人公はのちに結核を患ってサナトリウムに入所する。「燃ゆる頬」は、少年愛との別れの物語なのである。

では、この物語のどこにプルーストとの呼応を見出すことができるのか。まずは、魚住の登場場面である。ある日、主人公が花壇を花壇を歩いていると、蜜蜂による受粉に遭遇する。花粉まみれになって飛び立った一匹の蜜蜂は、しかし、いずれの花に止まるべきか迷っているように見える。

> ・・・その瞬間だった。私はそれらの見知らない花が一せいに、その蜜蜂を自分のところへ誘おうとして、なんだかめいめいの雌蕊を妙な姿態にくねらせるのを認めたような気がした。（p.210）

そのような観察をしている主人公の前に魚住が現れ、顕微鏡を見せようと主人公を誘う。円盤投げ選手で大男の魚住だが、この時はいつもと違った様相を見せる。

> すこし前から私は彼の顔が異様に変化しだしたのに気づいていた。そこの実験室の中の明るい光線のせいか、それとも彼が何時の仮面をぬいでいるせいか、彼の頬の肉は妙にたるんで、その目は真赤に充血していた。そして口許にはたえず少女のような弱々しい微笑をちらつかせていた。（p.211）

このエピソードが「ソドムとゴモラ」Ｉにおけるシャルリュスとジュピアンの出会いの場面を引き写していることは明らかである。この場面は、まるはな蜂による植物の受粉を思い描きながらゲルマント公爵夫妻の帰宅を中庭で窺っているで主人公が、二人の出会いを目撃するという設定になっている。植物受粉に関して、話者は次のような考えを述べている。

> 雄の花と同様に、ここにある雌の花も、もし昆虫がやってくれば、その「花柱」を弓なりに

なまめかしくまげ、相手をうまくなかへはいらせるために、偽善的な、しかし熱意をこめた娘っ子のように、人には気づかせずそっとその通路を縮めてやるだろう。(6, p.10[14])

主人公が待ちうける中庭に入ってきたシャルリュス氏は、常日頃男らしさを標榜し、狷介な性格で知られている人物であるが、この時ばかりは女性を思わせる様子をしている。「それほど彼の顔立ち、表情、ほほえみは、一時的に、それ［女性］になっていたのである」(6, p.12)。魚住とシャルリュスの関連は、あまりにも明白である。

一方「上級生達から少年視されて」いる三枝の方は、痩せた「静脈の透いて見えるような美しい皮膚の」少年で、「まだ薔薇いろの頬の所有者」として登場する。主人公と三枝の「友情の限界を超えだした」関係は、前述の通り、旅行中に終わりを告げる。主人公は、ばら色の頬の少年よりも漁村で出会った「妙に咳枯れた」声の少女により強く惹かれる自分を自覚するのである。旅行後、三枝はしばしば主人公に「まるでラヴ・レタアのような手紙を」書いてよこす。しかし主人公は「だんだんそれに返事を出さなくなった」。というのも「すでに少女らの異様な聲が私の愛を変えていた」からである。

それから数年が過ぎ、寄宿舎のことを思い出すと、主人公は次のように感じると記されている。「私は其処に、私の少年時代の美しい皮膚を［・・・］惜しげもなく脱いできたような気がしてならなかった」(p.220)。ここで言う「美しい皮膚」とは「ばら色の頬」とも言い換えられよう。この作品中、「燃ゆる頬」は、男性から愛される対象となりうる人物の象徴として機能している。

この機能は、丁度一年後に発表された作品、「顔」[15]においても同様に観察される。この作品においては「ばら色の頬」の持ち主は主人公、路易である。物語は時間の経過に従って、いくつかの断章から構成されている。

第一の短い断章は、「燃ゆる頬」の粗筋をなぞっている。寄宿舎で円盤投げ選手の上級生にいじめられている病弱な同級生。彼の赤い頬。彼に愛される「私」。また路易は、病気になった同級生からの「ラヴ・レタアのような手紙」に「ろくすっぽ返事も出さ」ない。ここで注目すべきは路易が「自分がその少年になってしまいたい」、つまりばら色の頬の持ち主として少年愛の対象になりたいと感じている点である。「顔」が「燃ゆる頬」より複雑なのは、このような路易の願望によって、少年愛から少女愛への移行がすんなりとは行われないことに起因すると考えられる。その例として、詩人に連れられて出かけた高原で出会った実業家の令嬢、ならびに関係と若い詩人仲間、嵬と主人公の関係を、次に考察したい。

少女への嫉妬

問題の令嬢について、詩人はルーベンスの描いたような顔だ、と評する。その時「路易はい

きなりぱあっと顔を赤くした」。その説明として「それを路易は自分がルウベンスの絵のことを何も知らないせいだと信じた」（p.273）と続けられるが、その真の理由は、路易がこの少女に惹かれながら、それを認められないでいる点にある。それは、ただの羞恥というよりも、少女愛への移行に踏み切れないでいる路易が、彼女を少年の愛を争うライバルとみなしていることに由来すると考えられる。路易は早速ルーベンスの画集を購入し、「毛の帽子」をかぶった女性の肖像が彼女にそっくりであることを発見するが、その画集はすぐにしまい込まれてしまう。というのも「昨日まで自分の持っていたばかりのとそっくりなばら色の頬をその少女もしているのが、路易には何となく気にいらなかった」（p.273）からである。少年の「ばら色の頬」がうつろいやすく、あるいは間欠的にしか得られないものであるのに対し、少女はそのこれを楽々と所有している。路易が失いつつあるものを、彼女らは所有し続け、少年達の愛を独占する。そこが路易の気に障ると解釈できる。

湖畔での滞在を題材にした作品を書こうかと試みて中断してしまうのも、「ただどうも、路易はその小説の中でいかにも自分が「毛の帽子」に恋しているように書いてしまいそうだった。それでは困る」（p.275－276）からだと説明されている。困る理由は、少女に惹かれながらも少年愛の対象となる自分を捨てきれないでいるアンビバレントな路易の心情以外に見出すことはできない。

二度目の滞在で令嬢と再会した路易は、しかし、令嬢とその母親が自分に何も告げずにその避暑地を去っていったことをひどく悲しく思う。これもまた、少年に引き留められながらも少女への傾倒をより深めていった路易の変化の表れと解釈可能である。

成功しない取り持ち

文学仲間の嵬との関係は、カフェの娘を交えた三角関係の様相を呈する。路易はかつて自分をいじめた円盤投げの選手に似た嵬を当初は敬遠する。また、数年前から好んで身につけた病身らしい顔も、今となっては嵬を惹き付けるのではないかという懸念から不安材料となる。ところが嵬はカフェの娘との仲介役を路易に依頼する。しかしこの取り持ちは成功しない。娘とうまくいかなくなった嵬を久しぶりに会い、声をかけられた路易は「以前のように顔をぱあっと赤くした」（p.282）。自分自身もカフェの娘との付き合いは順調ではない。娘との待ち合わせに失敗したある夜、路易が偶然に出会うのは、またもや嵬である。そのまま嵬と入った酒場で、路易はいつものオレンジエードではなく、嵬同様ウイスキーを注文する。これは路易にとっては頬のほてりをさまし、顔を青ざめさせる飲物である。しかしそんな行為は彼の心が「こんがらがっていた」ことの例証でしかない（p.284）、と説明される。というのも実は彼は娘ではなく嵬に出会ったことにむしろ満足しているからである。

> 酒場を出てからも路易はいつまでも嵬に別れたがらなかった。夜ふけの町を歩きながら、路易はぶらさがるようにして嵬の肩に手をかけていた。そして嵬をときどき娘のような目つきで見上げた。（p.284）

このように路易は、少年愛と少女への愛の間で揺れ動いているのであるが「そういう心のうちの混雑を、自己分析をしない路易は、そのまま打棄らして置いたので、それはますますこんがらがって行くほかはなかった」（p.285）。路易の心のうちを分析しないのは、何も本人だけではない。この作品のどこにもその混乱の理由は説明の場を得ず、その結果、「顔」は、一見不可解なエピソードを多く含む作品となっている。このような作品の理解への鍵の一つが、少年愛から少女愛への移行において「ばら色の頬」が果たしている機能なのである。

『失われた時を求めて』における呼応

『失われた時を求めて』において「ばら色の頬」を持つのは、第一にはアルベルチーヌを初めとする花咲く乙女達である。バルベックで主人公が出会う少女達の一群は、互いに区別し難いながらも、主人公は少なくともそこに当初から「ばら色の頬」を認めている。

> ［……］一人はきびしく見すえて笑うような一対の目によって、もう一人は、頬のばら色がゼラニウムの花を思ううかべさせるあのあかがねの色あいをおびていることによって、わずかに私に区別が認められるだけであった［……］（3, p.173）

彼女たちの頬、とりわけ最終的に欲望の対象となるアルベルチーヌの頬は、何度も変奏されて、繰り返し表現される。欲望とばら色の頬の関係は、次の描写においても明らかである。

> 私はアルベルチーヌの頬を横から見ていた。それはしばしば青白く見えるのに、いまこうして見ると、あかるい血にうるおってかがやき、冬のある日、一ところ日にあたっている石が、ばら色の花崗岩そっくりで、そこからよろこびを放っているように見える、そんな光沢をおびていた。そのよろこびのように、私がこのときアルベルチーヌの頬を見て感じたよろこびも生き生きとしていた、しかしこのときのよろこびは、私をべつの欲望に、散歩の欲望ではなくて接吻の欲望にさそうのであった。（3, p.407）

『失われた時を求めて』において、これに匹敵する頬を持つ男性登場人物は、サン＝ルーである。この人物は、名門ゲルマント家に連なる社交界の花形、女優ラシェルの熱烈な恋人、また男性的な魅力の全てを備えた軍人として、海岸の保養地バルベックに滞在中の主人公の前に登

場する。しかし、主人公の学友ブロックが「リフト」を「ライフト」と言い間違えた際、ブロックの気持ちを先んじて考えて顔を赤らめるのはサン＝ルーである。また、主人公の祖母からのプレゼントを受け取った喜びを隠しきれずに顔面を紅潮させるのも彼である（以上のエピソードは全てJF II に属する）。その一方、ラシェルとの関係にも関わらず、実はその叔父同様、彼は同性愛者であり、このバルベック滞在の間もホテルのエレベーター・ボーイを追い回していたことが「消え去ったアルベルチーヌ」で読者に明かされる。この事実は「花咲く乙女」ではまだ隠されているが、最終的にこれを知った読者は、サン＝ルーと主人公の関係について再考を迫られる。二人はバルベック滞在時に早くも近しい友人となり、しばしばレストランに揃って出かける。休暇後も主人公はサン＝ルーの属する部隊の駐屯地、ドンシエールに滞在に出かける（CG I）。『失われた時を求めて』の大きな特徴の一つは、主人公「私」の人物像について積極的な説明を避けることにあるが、主人公は、初対面の時からシャルリュス男爵の興味を引く存在である。この初老の同性愛者にとって魅力的な人物でありながら、その甥サン＝ルーとの間には、単なる友情関係以外の何物も存在しなかったのであろうか。

この問題を先ほど考察した堀の作品の例に照らして考えてみると、興味深い観察が得られる。少年愛と少女愛の交代は、主人公の第一のバルベック滞在にあっては明白である。この滞在中、サン＝ルーは決して少女達と出会うことがない。主人公と少女たちの出会いはサン＝ルーが駐屯地へ戻ったあとに設定されている。主人公は、サン＝ルーとの友情を深めるか、あるいは少女達に惹かれるかのいずれかなのであって、これらが同時進行することはない。また、サン＝ルーは主人公と女性との仲介役を何度も務める。彼の叔母で主人公の憧れの的ゲルマント公爵夫人への紹介、売春をしている貴族の娘として主人公に紹介しようとするフォルシュヴィル嬢への口利き、主人公の家を出奔したアルベルチーヌの捜索。これらの試みが一度として成功しないのはなぜだろうか。このような愛情の対象の交代現象を『失われた時を求めて』のテクストに見出すのは、作品の長さや構成からして単純ではない。それは堀作品に比べればより読みとりにくい形で存在するのであるが、興味深いのは、印刷稿には存在しない草稿の中に、より端的に見られる形で存在するのである。

次に挙げるのは、バルベックからサン＝ルーが一足先に去ったあとのエピソードの草稿である。サン＝ルーが寄こした手紙を、主人公は当初のうちこそ大切に扱うが、そのうちぞんざいに扱うようになる。引用中、「ケルクヴィル」は、最終稿でのバルベック、同じく「モンタルジ」はサン＝ルーにあたる。原文引用の後、拙訳を示すが、原文での削除部分等は必要に応じて省略した。また草稿であるため、文章が首尾一貫しない部分もあるが、適宜意味が通るように訳出した。

カイエ２８、n.a.fr. 16668（1910－11頃）より[16]

62 r ° -61 r °

Mettre quand Montargis quitte Querqueville

<Voir la phrase de la fin refaite page précédente>

J'avais pensé qu'une fois rentré dans sa garnison, Montargis <m'> oublierait assez vite. ~~Son~~ Ma grand'mère craignant que je n'éprouvasse une déception m'y avait préparé en me parlant disant que sa vie si ~~différente~~ <opposée>, si ~~absorbante~~ remplie aussi de travaux et de fatigues, et jusqu'au milieu si différent où il vivait à Paris quand ~~font rarement~~ il y viendrait, ~~pourraient~~ auraient pour résultat, sans que cela dût jeter une doute sur la sincérité des sentiments qu'il avait exprimés à Querqueville. J'ai eu autrefois à St Valenz* me disait-elle une petite amie avec qui nous nous étions jurées une amitié éternelle et de nous faire enterrer dans la même tombe. Je n'ai plus jamais entendu parler d'elle. Mais le temps ~~qu~~ strict écoulé pour que Montargis ~~arrivât à~~ <eût passé un jour dans> sa garnison et qu'une lettre en mît jusqu'à Querqueville, ~~m'arriva une lettre~~ dont ~~l'adresse~~ enveloppe écrite de caractères penchés que je connaissais bien et auxquels je prêtais une expression analogue à celle des traits de son visage et portant le le [*sic.*] timbre de sa garnison, me fit joyeusement battre le cœur. <que dans le courrier qu'on m'apportait je reconnus l'écriture penchée à laquelle je donnais comme aux traits de sa figure le charme de sa nature, du moins tel qu'il m'apparaissait à cette époque, timbrée de la petite ville du Nord dont il semblait me faire don, en s'y souciant de moi. Je remontai la lire dans ma chambre et je vis avec plaisir qu'elle avait 10 pages, sur un joli papier gris où se détachait en bleu ~~ce que je crus une cour~~ une sorte de petit lion que tenait dans une patte une baguette sur laquelle était une inscription, que je ne pus lire et le tout était surmonté d'une couronne qui me parut fermée et que je pris pour une couronne de prince, mais qui était en réalité une couronne de marquis surmonté du bonnet du pair de France. >

（モンタルジがケルクヴィルを去る時に入れること。最後の文は前のページに書き直したので見ること。ひとたび駐屯地に帰ってしまえば、モンタルジは私のことなどさっさと忘れてしまうだろうと私は考えていた。祖母は、私の失望を予測して、それに対する心構えができるように、こう言うのだった。モンタルジの生活は私の生活とは正反対といっても良く、仕事と疲労に満ちている。ケルクヴィルで示してくれた好意が心からのものであったことは全く疑う余地はないけれども、パリに戻れは、我々とは別世界に暮らしていらっしゃるのだから、それなりの結果に至るだろう、と。祖母が言うには、自分も昔、サン＝ヴァランスで女友達ができ、永遠の友情を誓って、同じお墓に入ろうと言

い合ったことがあった。でもその後、彼女の便りは絶えて聞かない。けれども、モンタルジが駐屯地で一日を過ごし、そこから手紙がケルクヴィルに届くだけの時間が正確に計って経った頃、~~一通の手紙が届いた。~~封筒の表書きは、私が良く知っている傾いた字体で書かれており、私はそれに彼の顔の表情と同様の表現を見出した。彼の駐屯地の消印が押されており、私は喜びに胸を躍らせた。＜私に届けられた手紙は私の知っている傾いた字体で書かれており、私はそこに彼の顔と同じく、彼の性格の魅力、少なくとも当時私にそう思われた魅力を見出すのだった。北部の小さな町の消印が押されており、私のことを考えてくれることでモンタルジが私に贈り物をしてくれるように思えた。私はその手紙を読むため部屋に上がり、手紙が10ページあることが分かって嬉しく思った。便箋は灰色のきれいな紙で、前足の片方に杖を持った一種の小さな獅子が青く浮き出ており、その上に私には解読できない銘、そして一番上には冠が描かれていた。冠は閉じているように思われたので、私は大公冠だと思ったが、実際はフランス重臣のボネが付いた侯爵冠であった。）

57 r °

Ces<ette> lettres [*sic*.] et toutes celles qui suivaient assez fréquemment me remplirent d'enthousiasme pour mon ami. Je montais <'allais> dans ma chambre ~~pour les lire~~ <pour etre seul> <en les lisant>; et

Si on nous apportait le courrier sur la plaque je les mettais dans ma poche sans les decacheter pour ne les lire que seul dans <ma chambre>. Je les gardais précieusement dans une portefeuille. ~~Je les~~ Puis elles perdaient peu à peu pour moi de leur valeur et je les j'ai jetées. Je le regrette maintenant.

（この手紙も、これに続いてしばしば届いた全ての手紙も、私を友人への熱狂で満たした。私は一人になるため部屋に上がり、手紙を読んで　[原文中断]

盆に載せて手紙が届けられると、私はそれを開けずにポケットに入れ、部屋で一人になってからでなくては読まないのだった。読んだ手紙は大切に紙ばさみにしまっておいた。そのうち手紙は徐々に私にとって価値を失い、捨ててしまうに至った。今ではこれを残念に思っている。）

我々が現在手にするテクストには、手紙のエピソード自体は残っているものの、主人公のサン＝ルーへの関心の推移については削除されている。

次に挙げるのは、主人公がサン＝ルーの駐屯地、ドンシエールで夜を明かす場面である。ホテルに泊まることにしていた主人公は、結局寂寥に絶えられず、サン＝ルーが兵舎に泊まれる

よう手配してくれるというくだりである。最終稿と異なり、主人公はサン＝ルーのすぐ隣の部屋に泊まることになっている。その夜の晩餐の間も、翌朝も、二人は最終稿に比べてより親密な雰囲気で過ごすことになっている。文中「伯爵夫人」とされている人物は、最終稿ではゲルマント公爵夫人にあたる。

カイエ31、n.a.fr. 16671（1908頃）より

42 r °

[...] si tu as besoin de q. q. chose, d'ailleurs moi ma chambre est celle-ci à côté de la tienne, je laisserai la porte ouverte tu n'auras qu'à m'appeler. Et d'ailleurs je l'annonce* que je n'ai aucune ennuie de me coucher (le pauvre garçon il était levé déjà 5 heures du matin) restons à bavarder et à boire jusqu'à ce que tu auras sommeil. J'avoue

43 r °

que j'étais si heureux d'être délaissé de la Comtesse que j'eus l'égoisme d'accepter. [...] je sentis que jamais je n'aurais été aussi heureux, et que je n'aimais rien autant que Montargis. ~~En tous cas pour la 1er fois~~ Et le matin, quand la * sonna, et que tout commençait à se réveiller dans la caserne, je décidai avec Montargis que j'allais partir en même temps qu'on [*sic*.] il allaient conduire ses troupes à ma manœuvre et prendre le premier train pour Paris. Il s'habilla, je me préparais, le régiment se formait dans la cour, les officiers arrivèrent.

（もし何か必要なものがあったら、僕の部屋は君の部屋の隣だし、ドアは開けておくから呼んでくれるだけで結構。それに、言っておくけど、そもそも僕は寝なくともいいんだ（実は気の毒に彼は朝の５時に起きたのだった）君が眠くなるまで、話したり飲んだりして過ごそうじゃないか。私は伯爵夫人につれなくされていることをとても幸福に思い、自分勝手にもこれを承諾した。[...] 私は、こんなに幸せだったことはかつてなかったし、モンタルジほど好きなものなど何もないと感~~じていた。いずれにせよ初めて~~

朝になり、合図が鳴って、兵舎では誰もが目を覚ます頃、私はモンタルジと相談して、彼が兵士達を演習に連れ出すと同時に私も出発して、パリ行きの一番列車に乗ることに決めた。彼は身支度をし、私は出立の準備をした。連隊は中庭で隊列を作り、将校達が到着していた。）

この様なテキストの改編は、何もプルーストが「燃ゆる頬」のテーマを消し去ったことを意味するのではない。それはより隠された形でテキストに底流し、読者が「ばら色の頬」の機能に気づいたとき、テクストに新たな光が当たる。少なくともそのようなものとして、テクスト

が機能する可能性を残しているのである。

時間的に言えばプルーストのテクストが先にあり、堀はその読者に過ぎない。しかし、双方のテクストの呼応関係を我々が読み解く場合、その時間差を考える必要はさほどない。ここで問題にした例については、片方によって他方がよりよく理解できる関係にあることは明らかである。ここに堀のプルーストに対する、直感的理解の例を見ることは、あながち間違いではないだろう。

註

1　三輪秀彦「堀辰雄とプルースト－『美しい村』を中心にして」,『国文学　解釈と教材の研究』第22.9, 1977.7, p. 95-99 が代表的。

2　以下、堀の作品、論考、書簡からの引用は、全て次の版に依った。旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに適宜改めた。引用に際しては極力本文中に巻・ページを記す。
『堀辰雄全集』 筑摩書房,1977-1980.

3　以上の分冊形式に関しては、フランス国立図書館のカタログを参照した。フランス国内で発行された印刷物は、一部を国立図書館に法定納本することになっているためカタログの信頼度はかなり高い。これによると、1931年以前のSG IIのエディションとしては、1922年と1924年の版があり、いずれも n.r.f. 版、三分冊での発行である。各分冊のページ数は、初版がそれぞれ230p, 236p, 230pであり、1924年の版では230p, 236p, 237pである。よって1924年の版についても分冊の区切りは初版と同一と推測される。

4　Proust, Marcel, *A la recherche du temps perdu*, 4 vol., Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1987-1989. 以下、原文のレフェランスはこの版によるものとし、巻数とページを示す。

5　III, p.1297.

6　1923年初版では「囚われの女」のサブタイトルとして「ソドムとゴモラ III」の表記が用いられた。この巻は死後出版のため、プルースト本人が生前手を入れたタイプ原稿に残っていた表記をそのまま踏襲したものである。この点についてはプレイヤッド新版、III, p. 1660 参照。

7　渡部麻美「堀辰雄＜プルーストに関するノート＞」,『昭和文学研究』第44号, 2002.03, p. 78-93.

8　- *Cahier Marcel Proust*, n ° 2, Gallimard, 1928.
Répertoire des personnages de *À la recherche du temps perdu* par Charles Daudet, précédé de "La Vie sociale dans l'œuvre de Marcel Proust" par Ramon Fernandez
- *Cahiers Marcel Proust*, n ° 3, Gallimard, 1929.
Morceaux choisis de Marcel Proust, précédés d'une préface par Ramon Fernandez

9　前掲論文p. 81. 渡部氏は、堀家蔵書調査によりこれを発見している。

10　渡部氏は、調査した堀の蔵書として *A la recherche du temps perdu*, tome 2-2, Gallimard, 1926.　を挙げている（前掲論文、p.81）が、これだけではJFが何分冊であったかは不明である。

11　『全集』第１巻、p.209-222. 以下この作品からの引用については巻数を省略する。

12　Radiguet, Raimond, *Les Joues en feu*, F. Bernouard, 1920.

13　*Les Joues en feu* 所収のものとしては、「花あるいは星の言葉」、「引っ越しと田舎暮らし」がある。詳しくは『全集』第５巻 p.550を参照のこと。

14　以後、『失われた時を求めて』の日本語での引用については井上究一郎訳、ちくま文庫、全10巻、1992-1993により、該当巻とページを示す。

15　『全集』第１巻、p.269-288. 以下この作品からの引用については巻数を省略する。

16　『失われた時を求めて』の草稿帳（通称「カイエ」。カイエはフランス語でノートの意）のうち75冊は、現在フランス国立図書館が所蔵しており、一般には１～７５のカイエ番号で呼ばれる。Nouvelle acquisition française（略号N.a.fr.）で始まる番号は、国立図書館手稿部の整理番号の一種で、カイエ番号とは別に各草稿帳に付けられている。folio（略号f ° ）はノートの一葉を、recto（略号r ° ）、verso（同v ° ）はそれぞれfolioの表面、裏面を示す。その他使用した記号の意味は次の通り。

消線　プルーストによる削除
＜＞　プルーストによる加筆、訂正
＊　推定的な解読